

3.11 東日本大震災を中学校でどう授業するか

読み原稿例

※PowerPoint の各スライドのノート欄と同じ読み原稿です。

スライド 1 3.11 東日本大震災を中学校でどう授業するか

今日は、東日本大震災について学びます。東日本大震災は、先生たち大人にとっては強く記憶に残っている出来事ですが、今の中学生のみなさんにとっては、生まれる前、あるいは記憶にない時期の出来事になっています。だからこそ、今日は「知っているつもり」で終わらせず、事実を確認しながら、自分の生活に引き寄せて考えます。今日の授業のゴールは、「怖かった」「大変だった」という感想で終わることではありません。災害が起きたとき、自分はどう行動するのか。家族や身近な人と何を確認しておくのか。今日からできることを一つ決めることです。震災を過去の出来事として見るだけではなく、自分と周囲の人の命を守る学びにつなげていきます。

スライド 2 授業の入口：3.11 を「自分ごと」に戻す

まず、この日時を見てください。2011 年 3 月 11 日、14 時 46 分です。この日時に何が起きたか、知っている人もいます。あまり知らない人もいます。知らないことは悪いことではありません。今から知っていけばよいのです。今日は、三つの流れで学びます。一つ目は、何が起きたのかを事実に基づいて知ることです。二つ目は、自分の地域や家庭で何を備えるのかを考えることです。三つ目は、今日からできる具体的な行動を一つ決めることです。震災を遠い地域の出来事として学ぶだけではなく、もし自分が災害に遭ったらどう行動するのかを考えていきます。

スライド 3 東日本大震災で起きたこと

東日本大震災では、2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分に、三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 の巨大地震が発生しました。大きな揺れだけでなく、各地を巨大な津波が襲いました。さらに、福島第一原子力発電所の事故も発生しました。つまり、地震、津波、原子力災害が重なった複合災害でした。政府資料では、死者は震災関連死を含めて 1 万 9787 人、行方不明者は 2549 人とされています。ここで大切なのは、数字をただ覚えることではありません。この一人一人に生活があり、家族があり、学校があり、日常があったということです。では、なぜこれほど大きな被害になったのか。そこから私たちは何を学べるのかを考えていきます。

スライド 4 震災を「感動教材」だけにしない

震災を扱うとき、気をつけたいことがあります。それは、震災を「感動する話」だけにしてしまうことです。助け合いや支援の話には大切な意味があります。しかし、「日本人はすばらしかった」「命を大切にしましょう」というまとめだけで終わると、防災の学びとしては不十分です。また、津波や被害の映像をたくさん見せればよいわけでもありません。強い映像は、心に負担を与えることもあります。今日は、何が起きたのかを事実で確認し、経験した人の声から教訓を考え、自分の地域と自分の行動へつなげます。この授業の後、自分に何ができるようになるかを意識して聞いてください。

スライド 5 津波から命を守る行動

東日本大震災から学ぶ重要なことの一つが、津波から命を守る行動です。海の近くで強い揺れを感じたとき、または弱くても長くゆっくりした揺れを感じたときは、警報を待たずに、より高い安全な場所へ避難することが大切です。スマートフォンに情報が出るまで待つ、誰かが指示するまで待つ、という行動では間に合わない場合があります。また、津波は一度で終わるとは限りません。繰り返し襲うことがあります。だから、警報や注意報が解除されるまでは戻らないことも重要です。ここで考えてほしい問いは、海の近くで強い揺れを感じたとき、スマートフォンにはまだ何も出ていない場合、自分はどう行動するかです。

スライド 6 自分の地域で何が起きるか

東日本大震災を学ぶだけで終わらせず、自分の地域に置き換えて考えます。この学校の周辺では、どのような災害リスクがあるのでしょうか。津波、洪水、土砂災害、高潮、火災、建物の倒壊、通学路の危険など、地域によって考えるべきことは違います。海から遠い地域なら津波だけを考えればよいわけではありません。川、ため池、古い建物、ブロック塀、狭い道、停電や断水なども考える必要があります。また、災害は授業中に起きるとは限りません。登下校中、家で一人のとき、家族と別行動のときにも起こります。この学校の周辺では、どの災害リスクが高いのかを考えてみましょう。

スライド 7 南海トラフ巨大地震をどう扱うか

東日本大震災を学んだ後、自分たちの将来に関係する地震として、南海トラフ巨大地震についても考えます。内閣府の被害想定では、厳しい条件を置いた場合、死者は最大約 29.8 万人、全壊・焼失する建物は最大約 235 万棟とされています。ただし、これは「必ずこうなる」という未来の予言ではありません。対策を考えるための想定です。また、南海トラフ地震臨時情報も、地震が起きる場所や時刻を高い精度で予測する情報ではありません。地震は、情報がなくても突然起きる場合もあります。だから大切なのは、いつ

起きるかを当てることではなく、いつ起きても行動できるよう、今日から何を準備するかを考えることです。

スライド 8 家族と連絡がつかない前提で考える

災害時には、スマートフォンがあるから大丈夫とは限りません。電話が混み合ってつながりにくくなることがあります。通信障害が起きることもあります。停電で充電できないこともあります。端末が壊れることもあります。SNS やメッセージアプリが使える場合もありますが、必ず使えると決めつけない方が安全です。だから、複数の方法を考えておきます。災害用伝言ダイヤル 171、web171、避難場所、集合場所、家族や身近な人との事前の約束などです。今日考えてほしいのは、電話がつかないとき、家族や身近な人はどこで確認し合うのかということです。連絡方法は、災害が起きてから決めるのではなく、平時に決めておく必要があります。

スライド 9 家庭備蓄を具体的に考える

防災というと、非常持出袋を用意することだけを考えがちです。しかし、大規模な災害では、電気、ガス、水道、交通、物流が止まる可能性があります。内閣府は、家庭で最低 3 日分、できれば 1 週間分の備蓄を勧めています。飲料水は、一人 1 日 3 リットルが一つの目安です。例えば 4 人家族で 1 週間分を考えると、飲料水だけで 84 リットルになります。これはかなり大きな量です。だからこそ、特別な防災用品を買うだけでなく、普段使う食品や水を少し多めに買い、使った分を補充するローリングストックの考え方が大切になります。自分の家には、水と食料が何日分あるのかを考えてみましょう。

スライド 10 50 分授業の流れ

このスライドは、50 分授業で実施する場合の流れです。最初の 5 分で、2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分という日時を提示し、何が起きたのかを問いかけます。次の 10 分で、地震、津波、原子力災害、被害状況など、震災の基本的な事実を確認します。次の 10 分で、震災を経験した人の声を視聴し、何を次世代へ伝えようとしているのかを考えます。その後、自分の地域のリスクに置き換えます。さらに、家族と離れている場面などを設定し、自分ならどう行動するかを考えます。最後は感想ではなく、今日からできる行動を一つ決めて終えます。避難場所を確認する、171 を調べる、備蓄を確認するなど、具体的な行動にします。

スライド 11 今日からできることを一つ決める

授業の最後に、家に帰って確認することを一つ決めます。避難場所を確認する。家族や身近な人と集合場所を決める。災害用伝言ダイヤル 171 や web171 の使い方を調べる。水や食料が何日分あるか確認する。

家具の中で倒れそうなものを見る。通学路の危険な場所を考える。どれでも構いません。ただし、家庭の状況は一人一人違います。「必ず両親と話す」と限定する必要はありません。一緒に暮らしている人、頼れる大人、自分で確認できる範囲など、それぞれの状況に合わせて考えます。防災は、授業を受けただけでは身に付きません。小さくても、実際に一つ行動することが大切です。

スライド 12 授業前の教師用チェック

最後に、授業を行う教師側のチェックです。被害者数などの数字は、最新の公的資料で確認します。古い南海トラフ地震の被害想定をそのまま使わないようにします。南海トラフ地震臨時情報を、地震予知のように説明しないことも大切です。津波については、警報を待たずに避難を始める場合があることを押さえます。また、被害映像や体験談を扱う場合は、生徒の心理的な負担に配慮します。震災を「日本人はすばらしい」という話だけに単純化しません。自分の地域のハザードマップへつなげ、スマートフォンだけに頼らない連絡方法を考え、最後に具体的な行動を一つ決めます。3.11 を過去の出来事にせず、自分と周囲の命を守る学びにしていきます。